

## 『ヴェニスの商人』における「金」のイメージについての考察

川 浪 亜弥子  
Ayako Kawanami

### はじめに

『ヴェニスの商人』は、シャイロックやアントーニオのような商人たちが住み、金がチャリンチャリンと次々と増殖していき、活気がありながらも気忙しく日常が過ぎていく国際商業都市ヴェニスのリアルな世界と、バッサーニオとポーシアを始めとする恋人たちの、恋の冒険とその成就に至るプロセスの中で紆余曲折に満ちたやりとりが描かれるベルmont（「美しい山」という意味を持つ）のロマンティックでゆったりとして穏やかな世界が交互に入れ替わりながら展開する芝居である。それぞれの世界において共に、「金」のイメージが重要な役割を持って機能している。ポーシアとの結婚を求めてあちらこちらからやってくる恋人たちが挑む箱選びの試練は、ギリシア神話の英雄イアーソーンが金羊毛を求めて挑む試練に喩えられており、ポーシアはまさに成功者に与えられる報奨金のごとき「金羊毛」として描かれている。一方、言うまでもなく、ヴェニスでは金の貸し借りで人々の生活が回っており、金こそが人々の生活のベースとなっている。この金の貸し借りから生じる罅れがやがては人肉裁判へと繋がっていく。この一貫した「金」のイメージは一見対照的な二つの世界を結びつけ複雑に絡み合わせていくのである。

ところで、『ヴェニスの商人』で最もよく知られているのは4幕1場の人肉裁判の場面であろう。ユダヤ人シャイロックに金を借りたアントーニオは返済期日までに借金3千グカットを用意することができず、シャイロックは契約の証文通りにアントーニオの体の心臓に一番近いところから肉1ポンドを切り取ろうとする。しかし、この危機一髪の様子は法学博士バルサザーに変装したポーシアの機転の効いた知恵によってひっくり返され、シャイロックは全財産を失い、キリスト教徒に改宗させられてしまう。

この芝居では、一貫して、ユダヤ教徒のシャイロックは高利貸しを営み、非社交的で、執念深く、貪欲で、つねに憎悪を心に抱く悪人として描かれている。対照的に、キリスト教徒たちは寛大で、気前がよく、社交的で、慈悲深い。したがって、この人肉裁判の顛末は、たとえどのような苦難に遭おうとも、最終的には善は悪を制するのだという構図を持っていると言えるだろう。<sup>1</sup> しかし「金」のイメージを辿って詳しく見ていくと、この勧善懲悪の構図とは異なるものが見えてくるのである。「金」がいったいどのような光を放っているのかを見ていくこととしよう。

### ベルmont: 「金羊毛」を求めて

ベルmontのポーシアへの求愛を心に決め、ポーシアの亡き父の遺言として残された婿選びの条件である正しい箱選びへの挑戦を決心したバッサーニオは、友人のアントーニオに金を貸してくれるように頼む。バッサーニオは次のように切り出す。

財産をすっかりすりへらしてしまった、というのも、  
おれのわずかばかりの財産では長続きするはずのない  
派手な暮らしをしばらくやってきたからだ。もちろん  
いまはそういう栄華をきわめた生活から身を引くことに

<sup>1</sup> ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の歴史を考察し、反ユダヤ主義の見地から『ヴェニスの商人』を分析した著書に以下のものがある。See James Shapiro, *Shakespeare and the Jews* (Columbia UP, 1996).

なんの未練もない、ただ一つ、気がかりなのは、  
 どうしたら借金から身をきれいにすることができるか  
 ということだ、贅沢三昧のおかげでそいつに  
 がんじがらめなのでね。アントーニオ、きみには  
 いちばん世話になっている、金のことで、友情でも。  
 そして、いままた君の友情にすがって、借金を  
 どうやって精算するかについて、おれが考えている  
 計画と目的をいっさいうちあけてしまいたいのだ。

(中略)

小学生だったころ、おれは一本の矢を見失うと、  
 もう一本、同じような矢を同じ力で同じ方向へ  
 今度は注意深く目をこらして放ち、前の矢を  
 見つけたものだ。つまり二本とも失う危険をおかして  
 二本ともとりもどしたのだ。 (1 幕 1 場)

'Tis unknown to you. Antonio,  
 How much I have disabled mine estate  
 By something showing a more swelling port  
 Than my faint means would grant continuance.  
 Nor do I now make moan to be abridged  
 From such a noble rate, but my chief care  
 Is to come fairly off from the great debts  
 Wherein my time something too prodigal  
 Hath left me gaged. To you, Antonio,  
 I owe the most in money and in love,  
 And from your love I have a warranty  
 To unburden all my plots and purposes  
 How to get clear of all the debts I owe.

. . . . .

In my schooldays, when I had lost one shaft,  
 I shot his fellow of the selfsame flight  
 The selfsame way with more advisèd watch  
 To find the other forth, and by adventuring both  
 I oft found both. (1.1. 125-137; 143-147)<sup>2</sup>

どうやらバッサーニオはなかなかの遊び人で、金遣いも荒く ('prodigal')、あちこちから多くの借金 ('great debts') をして、身動きがとれなくなっている ('gaged') ようだ。そして最も多くアントーニオに借金をしていることがわかる。バッサーニオは、見失った一本の矢を見つけるために全く同じ矢を同じ方法で注意深く射するという一か八かの冒険 ('by adventuring both') をすることで、矢を二本とも見つけ

<sup>2</sup> 『ヴェニスの商人』からの引用は、小田島雄志訳、『シェイクスピア全集』IV、白水社、1981年による。またシェイクスピアの原文の引用は、William, Shakespeare, *The Merchant of Venice*, ed. by Jonathan Bate and Eric Rasmussen (Macmillan, 2010).

ることができたという子供の頃の経験を語る。つまりバッサニオの借金地獄から抜け出す計画（my plots and purposes）とは、アントーニオの友情に期待してアントーニオからさらなる金を借り、その金を元手に金を手に入れ、バッサニオのこれまでの借金も、アントーニオから借りる元手となる金も回収する冒険に打って出るという事なのだ。子供の頃の冒険を、一か八かの賭けさらには投機という意味を持つ“adventure”ということばで表現しているように、バッサニオの計画は一種の投機行為なのである。

この投機の対象はベルモントに住まうポーシア姫というわけだが、バッサニオはアントーニオに、ポーシアが射止めるのに十分に価値のある人物であることを「金」のイメージを用いて説明する。

実はベルモントに大きな遺産をもつ女がいる、  
美しい人だ、そして顔の美しさ以上に美しい  
美徳までかねそなえている。あるときおれは  
その人の目から美しい無言のことばを受けとった。  
名前はポーシア、ケートーの娘でブルータスの  
妻となったあのポーシアにもけっして劣らぬ人だ。  
その価値は世界のすみずみまで知れ渡っている、  
なにしろ東西南北四つの風が、あらゆる岸边から  
名高い求婚者たちを吹き送ってくるのだ。あの人の  
額に輝く髪は金の羊毛のようだ、そのために  
ベルモントの邸は古代コルコスの岸边となり、  
金の羊毛を求める英雄ジェースンたちが続々  
乗りこんでくるわけだ。ああ、アントーニオ、  
彼らと張りあうだけの財産がありさえすれば、  
おれには成功するたしかな予感があるのだ、必ず、  
この手で幸運をつかみとってみせるのだが。 （1 幕 1 場）

In Belmont is a lady richly left,  
And she is fair and, fairer than that word,  
Of wondrous virtues. Sometimes from her eyes  
I did receive fair speechless messages.  
Her name is Portia, nothing undervalued  
To Cato's daughter, Brutus' Portia.  
Nor is the wide world ignorant of her worth,  
For the four winds blow in from every coast  
Renowned suitors, and her sunny locks  
Hang on her temples like a golden fleece.  
Which makes her seat of Belmont Colchos' strand,  
And many Jasons come in quest of her.  
O my Antonio, had I but the means  
To hold a rival place with one of them,  
I have a mind presages me such thrift,  
That I should questionless be fortunate. （1.1. 164-179）

バッサーニオはポーシアのすばらしい価値を、「裕福さ」、「美しさ」、「美德の高さ」の面から語っている。しかしここでいちばん最初に持ち出されることは「裕福さ」(richly left)である。さらにバッサーニオは、ポーシアの金色に輝く髪を金の羊毛(golden fleece)に喩え、ベルモントの邸を黒海沿岸のコルクスの岸辺に擬える。これは、オヴィディウスの『変身物語』の第7巻に登場するイアーソーンとメーディアの物語からの引喩によるものであろう。<sup>3</sup> コルクス王アイエテースは不寝番の竜に見張らせて金の羊毛を大事に守り持っていたが、その金羊毛を求めてギリシアの名士イアーソーンがコルクス王のもとへ赴く。コルクス王は三つの難題を課してイアーソーンを困惑させるが、イアーソーンに激しい恋心を覚えたコルクス王の娘メーディアは、イアーソーンに助言を与えることで金羊毛の獲得を手助けし、その後二人は結婚し、コルクスから逃れるという話である。オヴィディウスでは金羊毛の獲得は英雄となるための腕試しの結果でありメーディアはこっそりと妻となるのだが、シェイクスピアは金羊毛イコールポーシアと書きかえる事によって、求愛の成功は直ちに金の獲得にも繋がるというメッセージを作り上げ、冒頭から始まる「金」のイメージにぴったりくるようにしているのだ。

ポーシア(金羊毛)を求めて世界中のあちこちからやってくる恋人たち(イアーソーンたち)が彼女を妻とするためには、3つの箱からポーシアの絵姿が入った正しい箱を選ばなければならない。恋人たちはその一か八かの運試しに挑戦し、失敗に敗れ次々と退散していく。「私の運命は箱選びによって決められます、自分の好き勝手に選ぶ権利は許されていないのです」(2幕1場)とポーシア自身が語るように、この箱選びの結果は人の意思や力が介入することのない天の配剤によるものであるかのように見える。しかし、いよいよバッサーニオの番が巡ってくると、これまでは箱選びをする恋人たちを冷静に介入することなく見守っていたポーシアは、オヴィディウスのエピソードにおけるメーディアのイアーソーンへの同情的な態度を彷彿させるように、求愛するバッサーニオの気持ちに応じるようにドキドキする胸の内を表に出し、バッサーニオが鉛の箱を選ぶように暗に誘導するような歌を詠う。そしてバッサーニオが箱選びの挑戦に成功したとき、友人のグラシアノーは「われわれは英雄ジェースンだ、みごと金の羊毛を手に入れたぞ」(3幕2場)、“We are the Jasons, we have won the fleece.”(3.2. 247)と例の「金」のイメージで締めくくる。

### ヴェニスにおける金の商い

商業都市ヴェニスでは、人々は金を目当てに暮らしている。アントーニオは世界中のあちこちに商いの船を出して、船に積んで戻ってくる買付け品で金を増やしている。次の言葉はアントーニオの商いについて語るシャイロックのものだが、投機(ventures)という表現を使っていることに注目されたい。

だがいまのところあの男の財産は宙に浮いている。つまり船にのって、トリポリに一艘、西インドに一艘行っているはずだ。それに、取引所で聞いた話では、三艘目はメキシコへ、四艘目はイングランドへ向かっており、そのほかにもやたらほうぼうに投資しているらしい。(1幕3場)

Yet his means are in suppositions: he hath an argosy bound to Tripolis, another to the Indies, I understand moreover, upon the Rialto, he hath a third at Mexico, a fourth for England, and other ventures he hath squandered abroad. (1.3. 17-21)

一方、シャイロックは高利貸しを生業としている。バッサーニオのために金を借りにきたアントーニオに対して、シャイロックは次のような言葉で嘯み付く。

<sup>3</sup> 『ヴェニスの商人』におけるオヴィディウスのエピソードの影響については以下の文献に詳しい。See Jonathan, Bate, *Shakespeare and Ovid* (Clarendon, 1993), esp. pp. 151-157.

あんたはね、アントーニオ、これまで何度となく  
取引所でおれに悪態をつきなすったもんだ、  
おれが金を貸し、利息を撮るのはけしからんとな。  
おれはいつも肩をすくめてじっとがまんしてきた、  
忍耐ってのはおれたちユダヤ人の勲章なんでね。  
あんたはおれのことを異端者だの人食い犬だのと呼び、  
このユダヤ人の上着に唾を吐きかける、それもただ  
おれがおれの金を好きに使うからというだけのことで。  
そのあんたにおれの助けが必要となったらしい、  
あきれるじゃないか、おれのところにきて言うには、  
「シャイロック、金を貸してくれ」と、こうだからな。  
このおれの髭に唾を吐きつけたあんたがだぜ、  
まるで玄関先から野良犬を蹴っとばすように  
おれを足蹴にしたあんたが、金を用立てろ、だ。 (1 幕 3 場)

Signior Antonio, many a time and oft  
In the Rialto you have rated me  
About my moneys and my usances.  
Still have I borne it with a patient shrug,  
For sufferance is the badge of all our tribe.  
You call me misbeliever, cut-throat dog,  
And spit upon my Jewish gaberdine,  
And all for use of that which is mine own.  
Well then, it now appears you need my help.  
Go to, then. You come to me and you say  
'Shylock, we would have moneys' — you say so,  
You that did void your rheum upon beard,  
And foot me as you spurn a stranger cur  
Over your threshold. Moneys is your suit. (1.3. 108-121)

シャイロックは利息（'usances'）をとって金貸しをしている高利貸しだとして、常日頃からキリスト教徒から唾を吐きかけられたり、野良犬のように足蹴りされ戸口から締め出されたりと、人間以下の扱いを受けている。キリスト教徒たちは寛大で慈悲深く、利息などをとって金の貸し借りはしないのである。

しかし、シャイロックには、金の貸し借りに利息のやりとりはしないという寛大で慈悲深さに訴えるアントーニオの主義はあくまでも偽善的な態度にしか見えない。

なんだ、あいつ、まるで神様にごますった  
収税吏って面だ！ (1 幕 3 場)

How like a fawning publican he looks! (1.3. 39)

そしてシャイロックは、『創世記』(30: 31-43) から羊飼いやコブとその伯父ラバンのエピソードを持ち出して、投機によって得た清らかな金色に輝く「金」と、利息によって得た燻った色の「金」との間

の違いについて疑問を投げかける。そのエピソードというのは以下のような話である。ラバンは生まれてくる子羊のうちまだらとぶちはすべてヤコブのものとするという約束をする。ヤコブが発情期を迎えた雌羊の前に皮をむいた木の枝を突き立てると、やがて臨月を迎えた雌羊たちはぶちばかりを出産し、そのすべてがヤコブのものとなった、という話である。この話を聞いてアントーニオは「投機」と「高利貸し」の区別をはっきりさせようと一生懸命になる。

ヤコブのしたことは投機と言うべきだろう、  
それは自分の力で左右しうるものではない、  
神のみ手によって決められることなのだから。  
この話が聖書に出てくるのは利息をよしとするためか？ (1 幕 3 場)

This was a venture, sir, that Jacob served for.  
A thing not in his power to bring to pass,  
But swayed and fashioned by the hand of heaven.  
Was this inserted to make interest good? (1.3. 92-95)

ヤコブが得たものは、人の力によって操作されたものではなく、もっぱら神のみ旨によってもたらされたものだと言っている。そしてそれがアントーニオも携わっている「投機」(venture)というものだということだ。それに対し、「高利貸し」(interest)では人の手の介入によって金がどんどんつり上がっていく。ヤコブのものとなったぶちの子羊はどんどん増えたわけだが、果たしてそこに人の手の介入はなかったと言えるだろうか。シャイロックがラバンとヤコブの話で持ち出した「投機」と「高利貸し」の区別への疑問にははっきりとした回答が与えられないまま会話のやりとりが過ぎていく。

アントーニオは自らの主義を破って、この度はバッサーニオのために高利貸しのシャイロックから金を借りるのだという。「シャイロック、おれはもともと金の貸し借りに利息のやりとりはしない主義だが、友人の急場を救うためにはやむをえまい、この際おれの流儀を破ることとしよう」(1 幕 3 場)と言うのである。アントニー・ナトゥールはその著書『ニュー・ミメシス』のなかで「シェイクスピアは、キリスト教徒とユダヤ教徒との乖離があると同時に、経済的相利共生もあるのだということを明らかにしている」とシェイクスピアのヴェニスの経済社会を俯瞰する鋭い視点を見事に言い当てている。<sup>4</sup> アントーニオは自分の主義をもっぱら主張し、キリスト教徒とユダヤ教徒の商いへの姿勢を区別しようとするが、所詮ユダヤ教徒シャイロックとキリスト教徒アントーニオは同じ金が回っている一つの経済社会システムに属しているのであり、そこで扱われる金が手垢に塗れることのない眩い光を放つ「金」なのか、それとも手垢に塗れた鈍い光を放つ「金」なのかを峻別することは難しい。

またシャイロックとアントーニオの会話で問題となった「投機」と「高利貸し」の区別の問題は、ベルモントでのバッサーニオの箱選びの一件とも関わっていることがだんだんとわかってくる。バッサーニオの勝利は、神のみ手によるものなのか、それともポーシアの手を介して成就されたものなのか。この関わりは、先に見たようにベルモントでのポーシアの獲得が「金羊毛」の獲得と重ねられ、「金」のイメージで貫かれていることに気づくことで、はっきりとしてくるのである。もしポーシアの介入が透けて見て取れるとすると、キリスト教徒だって「高利貸し」的な気質と策略を持っているのだというメッセージが見え隠れする。

<sup>4</sup> アントニー・ディビット・ナトゥール著、山形和美・山下孝子訳、『ニュー・ミメシス』、法政大学出版局、1999年、233頁。  
A.D. Nuttall, *A New Mimesis: Shakespeare and the Representation of Reality* (Methuen, 1983).



## 箱選びから法廷の場へ

ふたたびバッサーニオが箱選びの冒険に挑戦する場面に注目しよう。バッサーニオの目の前には金、銀、鉛の三つの箱が並んでいる。金の箱の前に立ったバッサーニオは、「見せかけだけの真実だ、狡猾な世間がそれを使って 賢者をおとし入れる罠なのだ。とすれば、輝く金よ、マイダス王の食物となりえなかったおまえには用はない。」(3幕2場)、“The seeming truth which cunning times put on / To entrap the wisest. Therefore, then, thou gaudy gold, / Hard food for Midas, I will none of thee.” (3.2. 102-104) と言う。バッサーニオがここで言及するミーダスはギリシア神話に登場するプリギュアの王のことである。ミーダス王は、触れるもの全てが金に変わるという彼の望みが現実のものとして叶えられ、手にするものが次々と金に変わり大喜びするが、食べ物が硬くなり、飲み水が黄金の氷に固まるのを目にして、絶望し自分自身の望みを呪った。<sup>5</sup> ミーダス王は輝く金 (gaudy gold) の見せかけの煌びやかな輝きに騙されたというわけである。バッサーニオは、ミーダス王が陥った過ちにはひっかからないように金の箱を拒む。続いてバッサーニオは銀の箱の前に立つが、これも次のような言葉で拒絶する。「それに、なま白い銀よ、人から人へ使い走りをする おまえにも用はない。」(3幕2場)、“Nor none of thee, thou pale and common drudge / 'Tween man and man.” (3.2. 105-106) そしてバッサーニオはみすばらしく飾り気のない鉛の箱を選び、その中に美しいポーシアの絵姿を見つけるのである。その鉛の箱に記された銘は、「われを選ぶものは所有するすべてを投げうつべし」(2幕7場)、“Who chooseth me must give and hazard all he hath”) (3.2. 6) というものである。

アントニー・ナートルは、W・H・オーデンがその見事な『ヴェニスの商人』論 ‘Brothers and Others’ の中で、この鉛の箱の銘に本当の意味で挑んでいる人物が劇中に二人存在すると指摘していることを受けて、「それはアントーニオとシャイロックなのである。本当のアゴーンはまさにここに存在する」と述べている。<sup>6</sup> バッサーニオではなく、アントーニオとシャイロックそれぞれが彼らの大事にする「金」やその他すべてのものを投げ打つことで、苦悩しながら闘っているというのだ。この闘いの過程においてこれまで見てきた「金」の放つ光が変化していくと私は考える。その様子を見ていくとしよう。

アントーニオは心から愛する友バッサーニオのために自ら所有するものを投げうち、体の肉 1 ポンドを切り取られ命を失う危険を背負いこむ。芝居の冒頭で、バッサーニオから金の工面を頼まれたアントーニオは、彼の全てをバッサーニオに捧げようとする寛大な気持ちを示す。

おれの財布も、からだも、おれにできることなら  
なんでも、きみの必要のために喜んで提供しよう。 (1幕1場)

My purse, my person, my extremest means,  
Lie all unlocked to your occasions. (1.1. 141-142)

そしてアントーニオのこの友に対する深い愛情は、法廷の場で鋭く磨き上げられたナイフの刃を目の前にしても揺るがない。法廷の場でシャイロックはナイフを入念に研ぎ、アントーニオの肉 1 ポンドを切り取らんとする。まさにそのアントーニオのいまわのきわにおいて、法学博士に変装したポーシアは何か言っておくことはないかと尋ねる。アントーニオはバッサーニオに次のように訴えかける。

<sup>5</sup> 『ヴェニスの商人』では、イアーソンとメーディアの物語の他にもいくつかのオヴィディウスからの引喩が見られる。このプリギュア王ミーダスのエピソードも『変身物語』第11巻に典拠したものだろう。

<sup>6</sup> 前掲書、『ニュー・ミメシス』、231頁。W.H. Auden, ‘Brothers and Others’ in *The Dyer’s Hand* (Random House, 1962), pp. 219-237.

きみの奥さんによろしく言ってくれ、アントーニオが  
 どのように最後を迎えたか、そしてバッサーニオを  
 どんなに愛していたか、ちゃんと話してほしい、  
 話がすんだら、奥さんに判断してもらってくれ、  
 バッサーニオに心からの親友がいなかったかどうか、  
 きみが友人を失うのを悲しんでくれさえすれば、  
 その友人はきみの負債を支払うのを悲しみはしない。  
 あのユダヤ人の刃が少しでもこの胸に深く刺されば、  
 そのぶんだけ喜んで胸の底から支払うことができるのだ。 (4 幕 1 場)

Commend me to your honourable wife.  
 Tell her the process of Antonio's end.  
 Say how I loved you; speak me fair in death.  
 And when the tale is told, bid her be judge  
 Whether Bassanio had not once a love.  
 Repent not you that you shall lose your friend,  
 And he repents not that he pays your debt.  
 For if the Jew do cut but deep enough,  
 I'll pay it instantly with all my heart. (4.1. 283-292)

アントーニオはバッサーニオに、どんなに彼を愛していたか、心からの親友であったかということを死後も覚えておいてもらいたいと語る。バッサーニオの借金アントーニオの心からの愛情で支払われるのである。このことは、シェイクスピアが“I'll pay it instantly with all my heart”というニュアンスたっぷりの言い回しを用いていることで、より絶妙に表現されている。シャイロックのナイフの刃が深く心臓(“heart”)にまで食い込めば命でもって借金は清算されるわけだがそれと同時に、心(“heart”)でもって借金は清算されるのである。先に、アントーニオの「金」は投機によってどんどん増えていくことを見た。また、ヴェニス経済市場で回っている金を扱うわけだから、アントーニオの投機によって得る「金」とシャイロックの利息によって得る「金」はひょっとしたら区別がつかない可能性もみた。いずれにせよ、アントーニオの「金」は、丁度銀の箱の銘に記されていたような、人と人との間を回っている青白く光る暖かみのない「金」であった。しかしその「金」は今や無尽蔵の愛情と等価なものであり、暖かく温もりのある光を放っている。

一方、シャイロックもまたすべてを投げ打ってアントーニオへの憎しみをとことん追求していく。シャイロックは、娘のジェシカが沢山の金と財宝を携えてキリスト教徒のロレンゾーと駆け落ちしてしまったことを知ると、半狂乱となって支離滅裂な叫びをあげる。「ああ、おれの娘が！ おれの金が！ おれの娘が！（中略）娘がもってるんだ、おれの宝石も、おれの金もだ！」(2 幕 8 場)、“My daughter! O my ducats! O my daughter! . . . / She hath the stones upon her, and the ducats.” (2.8. 15; 22) そして娘の失踪事件に続いてアントーニオの海での損失事故について聞かされたシャイロックは、「それぞれ、娘の次が貸し金だ、みんなおれはなくしちゃったんだ」(1 幕 3 場)と語る。娘の失踪の件においても、アントーニオの海難損失の件においても、シャイロックの関心事はひたすら彼の金であるかのように聞こえてくる。しかし以下のユダヤ人の友テューバルとのやり取りから、図らずながらもシャイロックが彼の大事な金をすべて投げ打つ行動に至る心の経過を読み取ることができる。ジェノアから戻ったテューバルは失踪したジェシカについての消息と同時に、アントーニオの座礁した船についての情報も持ち帰って来た。



シャイロック ああ、それで、それで、ダイヤモンドが消えちゃった！ フランクフルトの市場で二千ダカットもとられたやつだ！ おれたち民族にいまのいままで呪いが降りかかったことはなかった、おれはいまのいままでそれを感じたことはなかった。あのダイヤモンドだけでも二千ダカットだ、そのほかにも高価な宝石が山ほどだ。ああ、娘なんかおれの目の前でくたばればいい、その耳に宝石が残っておれば！ おれの目の前で棺桶に入れられればいい、持ち逃げした金を身につけておれば！ あの二人のことでなんにもわからなかったんだな？ ふん、そうかそうか、探すだけでもどれだけ金を使っただけかしたもんじゃない、損の上塗りとはこのことだ！ 盗っ人に大金をもって行かれ、その盗っ人捜しに大金を使い、埋め合わせもできなきゃあ、腹いせもできん。不運という不運がみんなこのおれの肩にのしかかってくる、溜息と言やあみんなおれのつく溜息だ、涙と言やあみんなおれの流す涙だ。

テューバル いや、不運にみまわれる人間はほかにもいるぜ。ジェノアで聞いた話だが、あのアントーニオだって—

シャイロック なに、なに、なに？ 不運か、不運か？

テューバル 大型の船が難破したそうさ、トリポリスから帰る途中。

シャイロック ありがたい、ありがたい。ほんとうだな、ほんとうだな？

テューバル その難破船から助かって帰った船乗りたちと話をしたんだ。

シャイロック ありがとう、テューバル、いい知らせだ、いい知らせだ！ ハッ、ハッ、ハッ。どこで聞いたと？ ジェノアでか？

テューバル そのジェノアでもう一つ聞いた、娘さんはなんでも一晩に八十ダカットほど使っているそうさ。

シャイロック なんだと、短剣でこの胸をえぐる気か。もう二度とおれの金にはお目にかかれないのか。八十ダカットもいっぺんにか！ 八十ダカットも！

テューバル おれはアントーニオの債権者たち何人かといっしょにヴェニスに帰ってきたが、あの男も破産するほかないだろうとみんな言っていた。

シャイロック そいつは嬉しい話だ。よおし、苦しめてやるぞ、責め苛んでやるぞ。まったく嬉しい話だ。 (3幕1場)

SHYLOCK Why, there, there, there, there! A diamond gone, cost me two thousand ducats in Frankfurt! The curse never fell upon our nation till now. I never felt it till now. Two thousand ducats in that, and other precious, precious jewels. I would my daughter were dead at my foot, and the jewels in her ear! Would she were hearsed at my foot, and the ducats in her coffin! No news of them? Why, so — and I know not how much is spent in the search. Why, thou loss upon loss! The thief, and no satisfaction, no revenge, nor no ill luck stirring but what lights o'my shoulders, no sighs but o'my breathing, no tears but o'my shedding.

TUBAL Yes, other men have ill luck too. Antonio, as I heard in Genoa—

SHYLOCK What, what, what? Ill luck, ill luck?

TUBAL —hath an argosy cast away, coming from Tripolis.

SHYLOCK I thank God, I thank God. Is it true, is it true?

TUBAL I spoke with some of the sailors that escaped the wreck.

SHYLOCK I thank thee, good Tubal, good news, good news! Ha, ha, heard in Genoa?

TUBAL Your daughter spent in Genoa, as I heard, one night fourscore ducats.

SHYLOCK Thou stick'st dagger in me. I shall never see my gold again. Fourscore ducats at a

sitting, fourscore ducats!

TUBAL There came divers of Antonio's creditors in my company to Venice, that swear he cannot choose but break.

SHYLOCK I am very glad of it. I'll plague him, I'll torture him. I am glad of it. (3.1. 80-108)

このテューバルとシャイロックのやりとりでは、娘の金の無駄遣いの様子とアントーニオの金の不幸な損失の様子が代わる代わる、くるくると回転するように語られている。娘の乱費についての情報を知らされたシャイロックは激しく狼狽えるが、次にアントーニオの船の難破の情報を知らされると、「ありがたい、ありがたい」、「いい知らせだ、いい知らせだ」と勢いを取り戻し、兼ねてからのアントーニオへの憎しみを新たに増幅させていく。娘ジェシカによって金がどんどん使われていくことへのショックとアントーニオへの憎しみがシャイロックの心の中でくるくると回転しながら交錯する。娘が一晩に80ダカットを使い込んでいることを聞いたシャイロックは、「なんだと、短剣でこの胸をえぐる気か」と狼狽しぎりぎりにまで追い詰められるが、その想いがアントーニオの肉1ポンドを切り取ることへの執着に転じるのである。シャイロックの「金」はアントーニオへの憎しみと等価となる。これはアントーニオの「金」が深い友情と等価物となったこととはまったく真逆のものに見えるが、元来は暖かみを帯びない不毛な「金」が憎しみという感情を帯びた光を放っていると言えるだろう。

さて、このテューバルとシャイロックの会話にはもう少し続きがある。テューバルは、ジェシカがジェノアで指輪と猿一匹を交換したらしいことをシャイロックに伝える。

テューバル その債権者の一人が指輪を見せてくれたが、娘さんから猿一匹の代金にもらったそう  
だ。

シャイロック 畜生、娘のやつ！ おれを責め苛む気か、テューバル。あれはおれのトルコ玉だった、死んだ女房のリアがくれたものだった、結婚する前に。荒野を埋めつくすほどの猿の大群とだって交換できるもんか。

テューバル だがアントーニオもおしまいだって話はまちがいない。

シャイロック うん、そうだ、そのとおりだ。(3幕1場)

TUBAL One of them showed me a ring that he had of your daughter for a monkey.

SHYLOCK Out upon her ! Thou torturest me, Tubal. It was turquoise, I had it of Leah when I was a bachelor. I would not have given it for a wildness of monkeys.

TUBAL But Antonio is certainly undone.

SHYLOCK Nay, that's true, that's very true. (3.2. 114-121)

娘のジェシカが、シャイロックの妻リアの形見である指輪を猿と交換して売り払ってしまったことに、シャイロックは非常なショックを受けている。彼にとってはその指輪はトルコ玉、つまり大きな財宝であったが、心の財産と読み取ることもできるのだ。このシャイロックの言葉を妻のリア、さらには娘のジェシカへの愛情表現として受け止めるとすれば、先のテューバルとの会話の中で言っていた、「探すだけでもどれだけ金を使ったかしたもんじゃない、損の上塗りとはこのことだ!」という言葉が、愛する娘のために、愛する娘をなんとしても見つけ出したいという思いで、大切な金を投げ打っているシャイロックの姿が浮き彫りになってくる。C.L. バーバーはこの場面に関して、「シャイロックがある穏やかな感情をあるように見せ、同時に残酷な感情で復讐を追い求めるように描くのは如何にもシェイクスピアらしい。同情を引くものがある。しかし、それは喜劇を生み出すための材料となり、そこで生み出

される笑いはますます愉快なものとなる」と述べている。<sup>7</sup> シャイロックはあくまでも喜劇のなかで愚かしいことを笑いとして浄化するための嘲笑的的として捉えられている。しかし、これまで「金」のイメージにこだわりながら辿って来たように、「金」はその時々には煌びやかな光を放ったり、燦った光を放ったりする。また不毛で冷たい光を放つ時であれば、親切心に満ちた温かい感情であれ、残酷さに満ちた冷たい感情であれ、血のかよった暖かい光を放つ時もある。つまり「金」は玉虫色の光を放つのである。そのことに気づかせてくれるきっかけをシャイロックという人物は提供してくれる。このような見方に立つとき、「ああ、おれの娘が！ おれの金が！ おれの娘が！（中略）娘がもってるんだ、おれの宝石も、おれの金もだ！」（2幕8場）、“My daughter! O my ducats! O my daughter! . . . / She hath the stones upon her, and the ducats.”（2.8. 15; 22）という混乱を極めた支離滅裂の叫びが、単に金だけを追いかける強欲な男の言葉としてではなく、娘への愛情と金への執着が心の中でぐるぐると巡って闘っている男の言葉として響いてくる。

### おわりに ― ふたたびベルモント

変装したポーシアの登場によってあの恐ろしい人肉裁判はなんとか解決を見るに至り、恋人たちはみなベルモントに集う。ポーシアの留守の間、彼女の邸を守っていたジェシカとロレンゾーは、主人の帰りを待ちながら、邸に音楽を奏で蠟燭に火を灯して歓迎の準備をする。なんとも穏やかな夜だ。音楽の調べに穏やかな静けさと月明かりが翳った薄暗がりの夜の闇が溶け合って、甘いハーモニーを奏でている。帰還の道すがらいよいよ邸へと近づいたポーシアとネリッサはこの音楽の調べに感動して次のようなおしゃべりをする。

ネリッサ あれはお邸の楽師たちですわ、きっと。

ポーシア なんでもまわりのものとの調和が大切なのね、

あの音楽も昼間よりずっとところよく聞こえるわ。

ネリッサ 夜の静けさが花を添えているのでしょうか、奥様。（5幕1場）

NERISSA It is your music, madam, of the house.

PORTIA Nothing is good, I see, without respect.

Methinks it sounds much sweeter than by day.

NERISSA Silence bestows that virtue on it, madam. (5.1. 105-108)

どんなものでもそれが置かれている状況（‘respect’）を考慮することでその価値が決まってくるのだとポーシアは言う。別の言い方をするとすれば、同じものでも、違った状況から見ると、違った角度から見ると、違ったものに見えるということだろう。いま聞こえてくる音楽は、夜の静けさと相俟って、甘い調べとなって心に沁みしてくる。この音楽を昼の明るみのなかで聞くことがあるかもしれないが、それは別のものとして耳にとどく。

同様に私たちは「金」の放つ色が見る角度によって、手にするものの見方によって、いかようにも変化する様子を見てきた。見る角度によって変わる玉虫色なのだ。『ヴェニスの商人』の最後のシーンは、悪人のユダヤ人シャイロックがキリスト教に改宗させられつつも事実上姿を消し、彼の娘ジェシカはキリスト教徒と結婚することで、キリスト教徒の社会が平和に維持されている。しかしその平和な社会を別の角度から眺めると、どのように見えるのだろうか。ユダヤ人シャイロックが追放された意味をあらためて問われているような気がする。

<sup>7</sup> C.L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy* (Princeton, 1959), p. 184.